



The Japan Society of Archives Institutions Kinki District
Branch Bulletin

全史料協近畿部会会報デジタル版

No.93

2025.10.3 ONLINE ISSN 2433-3204

全史料協近畿部会第 174 回例会報告

2025 年（令和 7）3 月 9 日（日）

会場：京都芸術大学 直心館 1 階 J-11 教室

テーマ：調査時に現場ですべき応急処置 —紙資料を中心に—

曾我友良（貝塚市郷土資料室・全史料協近畿部会運営委員）

これまでの例会（ワークショップ）において、史料調査に際して、調査者が現場で気を付けて読み取らなくてはならない素材や劣化状態、ひいてはその場で行うべき対応について取り組んできた。とくに2017年「古文書の損傷と処理方法についてのワークショップ—誰にでもできる『文化財基準をクリアした』補修方法—」では、調査現場で可能な史料を劣化させない「処理方法」を学ぶ機会を得た。今回は、それら劣化や損傷の事例としてどのようなものがあるのかを列挙した上で、改めて「保存修理の基本的知識を前提として、できること、必要なことのみを行うことが重要」とし、劣化が促進されることを食い止めるための知識と簡易な技術の共有が主眼となった。

事例の紹介では、現場でよく目にする剥がせなくなったセロテープやサビてしまった書類の綴じ金具、剥がせるはずだった糊付きの付箋など、極めて厄介な存在であり、早急な処置が求められるものの、専門的な知識と経験が必要で、調査者には対応できないことが多い。しかし、中性紙封筒の利用は直接的な解決策ではないにせよ、長期保存のためにできる一つの対応策であり、整理法として普及している。同様に消極的でも効果があるのが、「間紙を入れる」「折りを減らす」といったごく簡単な改善である。

処置方法の実習では、電子レンジを用いた簡単な糊作りのほか、史料の強いしわを伸ばすためミストを生成する市販の美顔器を活用するなど、随所に工夫が見られた。防腐剤やその他の成分の入った糊は変色を招くことがあり、安易には手を出せないことも改めて示され

た。一方で小麦でんぷん糊自体も、将来的には変色のリスクや完全な除去が難しいという問題を抱えているが、それに代わる完璧な素材は見つからないとのことである。いずれにしても、第1回のワークショップで学んだ「可逆性を守る」ことが大事である。

現場で遭遇する史料のほとんどは紙資料であり、その長期保存に適する方法としては、繕い（補修）をして裏打ちが一般的な処置、医療に例えるなら、「手術」に相当する「修理」である。指定品の場合は補助金の対象となるものの、個人財産と位置付けられる未指定品では資金が出ない。その前段の、あくまでもモノがさらに傷まないようにする簡単な処置が養生、処置であり医療では「手当」に相当するが、指定品ですら資金が出ない実態にあり、ましてや、未指定品ともなれば資金確保には高いハードルがある。さらに予防的観点から「生活習慣」改善に相当するのが「保存環境」の見直しであり、具体的には劣化しにくい温湿度管理が挙げられる。こちらも指定品の場合は補助金が付く場合はあるものの、未指定品では難しい。しかし、「保存環境」の整備は施設や空調など大規模なものだけでなく、むしろ包み紙や保存箱などの方が有効な場合も少なくない。これらを踏まえた簡単な処置やちょっとした改善こそが長期間保存につながり、地道な努力といえよう。資金の問題も含めて考えたとき、史料調査において現場で遭遇する紙資料に対してできることは、むしろ簡単で誰でもできる「手当」や費用をかけずにできる「保存環境」の改善である。これを調査者にしてほしいというのが、講師の主張であった。また、調査者が現場を離れた後にも、所有者が専門家に相談できる環境を確保できるようにすること、言いかえると史料を長期保存するためのネットワークの構築が今後の課題として提示された。

アンケートでは、調査の過程で修復まで手を伸ばすことは困難であることや、どうしたら良いのかノウハウを持ち合わせていない中で、今回の例会（ワークショップ）に参加できて良かったとの声が数多く寄せられた。

また、今回のワークショップは通算6回目となり、参加者はのべ90人を超えたであろうか。それでも、多くの参加者にとっては未知の領域である。昨年度のワークショップでも触れたが、この内容を関係者に広く共有することが求められている。講師をつとめていただいた大林賢太郎氏と、ともにこのワークショップに担当委員として関わってきた島津良子氏と私とで、それぞれの立場からまとめていこうと企画しているが、具体化に向けて動き出したい。

なお、ワークショップでの機材の取り扱い、材料準備など、大学院生のみなさんの協力を得ている。末筆ながら深く感謝申し上げます。

例会参加記

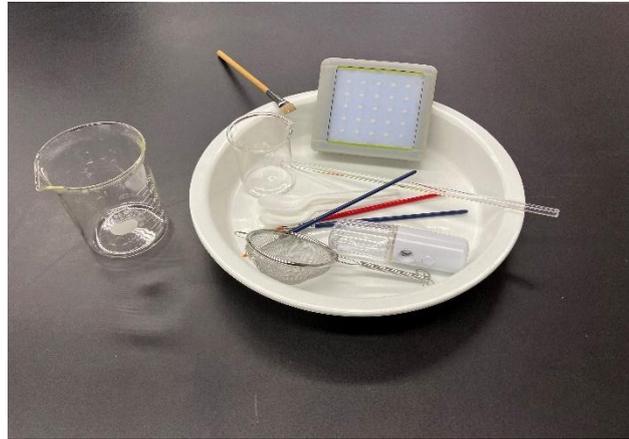
宮田克成（三豊市文書館）

本例会は、講師である大林賢太郎氏の講義と、それを受けてのワークショップで構成されている。頭では応急処置について理解していても、経験していなければ、いざという時に動けないとの思いが筆者にはあり、特に後半のワークショップに期待して本例会に参加した。

前半の講義では大林氏から、紙資料の劣化についてその種類や原因など、詳しい説明があった。特に処置の緊急性の判断基準として、①断裂して動いてしまうと、元の場所がわからなくなる、②その損傷箇所を起点に劣化損傷が進行する、③今なら処置することが可能だが、これ以上進行すると難易度が高くなる、④処置しなければ調査できない、などを紹介された。実際に実践していくのは難しいと思うが、日々の業務でも大いに参考になる内容の講義であった。

後半のワークショップでは、実物の文書を用いて、簡単な応急処置を行った。まず最初に処置のために必要な小麦でんぷん糊について、電子レンジを用いた簡易な糊の炊き方の実習があり、筆者が実際に体験した。大量の糊を鍋等を使用して作っても、使いきれずに腐らせてしまうことはままあることで、筆者も何度か経験している。そのため、使い切る分の糊を作るという意味では、電子レンジを使用しての糊づくりは非常に有効であると思う。実際の糊づくりは、短時間の加熱と攪拌を何度も繰り返すのだが、筆者が加熱と攪拌を繰り返している途中に、何ゆえか質疑応答が始まってしまった。そのため質疑応答が終わるまでの間、

筆者をはじめとした参加者の一部は、困惑した時間を過ごすことになった。筆者はどの程度まで加熱すれば良いかわからないまま、ひたすら加熱と攪拌を繰り返すこととなった。このあたりについては、担当の運営委員にもう少し丁寧な進行管理をお願いしたかった。またワークショップの後半では、美顔器を用いて文書のシワを修復する実習



を行った。大林氏によれば、霧吹きなどより美顔器の方が水の粒子が細くなるため、必要以上に紙を濡らさずにシワの修復が可能とのことであった。しかし終了時間も迫っていたため、実習の時間が十分に取れなかったことが残念であった。筆者も実習を行ったが、思ったように修復はできなかった。シワの修復のためには、どの程度の水分を与える必要があるのか、もう少し詳しく聞きたかったように思うし、もう少し丁寧な対応があっても良いように思った。このようにワークショップについては、総じてもう少しきめ細やかな対応と進行管理をお願いしたかった。

さて、これで例会としては一通りの内容を終了したわけであるが、筆者に一番のインパクトを与えてくれたのは、終了直前（終了直後？）に行われた講師の大林氏と運営委員の島津良子氏との議論であった。講師の大林氏は文書の場合、その調査が修復の最後の機会になる可能性が高いので、調査の際に可能な限り丁寧な処置をした方が良いという。一方で島津氏は、調査時の処置はあくまで応急処置であり、はずれた付紙を元の位置に戻すなど、その場でしかわからないことを処置する程度しか難しく、処置についてもあくまで応急処置であることがわかるように、あえて現在の工業製品を用いているという。そして本格的な処置は後世に委ねるといふ。これは修復を専門とする立場と、古文書調査を中心にした立場の違いと言えよう。アーカイブズの議論でなかなか進まない難しい問題が、修復などの専門的な知見・理論を、どこまで文書館等の現場に落とし込むかという点である。何もこれは修復に限ったことではない。近年の課題としてはデジタル化の問題なども同様である。特に筆者が勤務する小規模自治体の文書館のような人員的にも予算的にも厳しい状況に置かれている現場では切実な問題である。お二人の議論は、まさに専門的な知見・理論を、現場に落とし込むための議論であったように思う。確かに大林氏の言うように、今後さらなる修復が行われるような文書はほんの少数であろう。その意味では、調査の際の処置が最後の修復の機会と言えるであろう。しかし、島津氏の言うように、限られた時間と予算のなかで、どこまでの処置が可能であろうか。実際には電子レンジで糊を作るようなことも出来かねる状況である。双方の意見が立場の違いによる正論であるため難しい問題であるが、そこをすり合わせて行くことが今後必要なことであろう。今回はお互いの立場の違いによる考え方の相違を確認した段階で議論は終わってしまったが、このような議論を聞いたことが、大きな収穫であった。今後、お二人の議論の続きを聞くような例会があっても良いように思った。

このように全体の進行については若干の問題を感じたものの、例会全体は大いに参考になる内容であり、とくに最後のお二人の議論が筆者には有意義であった。